「葦」第52号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院
看護部長　橋口　智子

新型コロナ感染症が世界的に蔓延して2年目の2021年度は新型コロナ感染症の第4波、5波、6波を経験した年でした。中でも第6波からの感染者数の増加は5波までには見られなかった数字が並ぶほど多くの感染者が発生しました。その度にコロナ病床を増減させることを余儀なくされ、病棟では担当する診療科が変更されることもあり、看護職にとっては非常にストレスフルな状況が続きました。本当に厳しい状況でしたが、各師長のマネジメントにより部署間での応援が活発にできたことで乗り切れたと感じています。

そのような中でしたが、2021年11月3日～4日に奈良市に於いて第59回全国自治体病院学会が開催され、当院は、看護分科会の幹事病院としての役割を担いました。県内の自治体病院の看護部長方と協力し、各施設からも積極的に演題登録を行いました。院外発表の一覧にあるように当院看護部からも45題の演題を発表することができました。日々頑張って取り組んでいることをまとめ、他施設の医療職、特に看護職に意見をもらう非常に貴重な機会であったと思います。これほど多くの発表を一つの学会に提出する機会はなく、現場の看護職の皆さんが、どんな看護を目指して取り組み、何に苦労し、どのような成果につながったのかが手に取るように分かりました。直接看護の実践から離れている私にとっては、色々な工夫と試行錯誤を繰り返しながら「より良い」を目指している姿が創造でき、とてもうれしい機会でした。

看護研究というとハードルが高く感じる方も多いと思います。最近の看護学会等では、実践報告も多くなされていますので、自分たちが実践している看護をまとめ披露するといった活動も積極的に行っていきたいと思います。臨床の看護職はとても多忙ですが、実践内容をまとめることで自分たちの行った看護を客観的に振り返る機会となります。学会発表で、他者評価を受け、色々な意見に触れる機会として恐れずにチャレンジしてくれることを願っています。そして、このような活動の先に看護研究という形でまとめる力に繋がり、看護職としての自信につながっていくと期待しています。何よりも患者さんへ提供される看護が良くなることにつながります。

最後に、どのような状況においても、看護職として患者さんに寄り添い、最善のケアとはどのようなものかを考え続けてほしいと思います。また、その結果を色々な機会を使って発信することで、当院の看護が更に発展していくことを願っています。